

JCA News

Japan Communication Association (JCA) Newsletter



日本コミュニケーション学会ニュースレター
日本学会会議協力 学術研究団体



Contents 137 2024.11

1. 巻頭言	1	学会賞(書籍部門)応募について	
2. 私にとってコミュニケーション学とは	4		
3. 2024年度第1回理事会報告	7	6. 事務局報告	21
4. 2024年総会議事録	13	7. 広報局便り	24
5. 学術局からのお知らせ	17	8. 支部ニュース	26
ジャーナルに関するお知らせ		9. マイページ登録のお願い	29
年次大会 発表論文・企画セッション募集		10. 編集後記	29

日本コミュニケーション学会事務局

連絡先 <http://jca1971.com> 03-6824-9372 jcom-post@as.bunken.co.jp

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター内

巻頭言

質的研究をするということを振り返って

灘光 洋子 (立教大学)



「異文化コミュニケーションは海のように広く深い。」これは、異文化コミュニケーション領域の教員であった私が、かつて研究科のオリエンテーションで新入生に向けた挨拶で述べた言葉である。一部の同僚には、入ったばかりの学生を脅かすと不評だったが、異文化コ

ミュニケーションに限らず、コミュニケーション研究は領域横断的でその射程は広い。追いかけるうちに波に流され、目指す方向が分からなくなったり、自分がどこにいるのかを見失ったりしては溺れてしまう。

質的研究、特に人々の「語り」を中心に研究を行ってきたが、研究者としての立ち位置については常に心にあつた。語りをどう読むかの起点は自分にあるからだ。研究者の価値中立性や無色透明を装う「客観性」に疑問を呈する潮流は1990年代に台頭し、今や質的研究には欠かせない見地と言って良い。鯨岡峻(2020)は学会誌の特別インタビュー企画において、質的研究者は自分の視座や主体性に自覚的であるべきとし、「研究者が黒衣にならない研究でなければ、質的研究とは言えないのではないのでしょうか」(p.64)と言い切っている。勿論、質的研究も一枚岩ではなく、分析方法も様々だ。しかし、研究者の立ち位置を問う姿勢はどのような質的研究にも通底しているように思われる。

今回、ニュースレターに寄稿する機会をいただいた。この機会に改めてこれまでを振り返り、研究するという事について記憶に残る出来事の幾つかを共有したい。

- (1) ある学会でホロコーストについて発表した研究者に質問した時のことである。広島出身で家族にヒバクシャがいることを告げると、「灘光さんは被爆二世ですね」と返された。その時のなんとも言えない違和感は今でも鮮明に覚えている。確かに定義の上ではその通りである。この違和感

はどこから来るのか。自分が類型化され細分化されたことへの一種の抵抗だったかもしれない。フuzzyな部分、切り分けからこぼれ落ちてしまう「私の現実」が傍へと押しやられ、小さな箱に入れられてしまうような嫌な感触。他者から名付けられ付与された、これまであまり意識してこなかった自己の輪郭への戸惑い。同時に、私自身も分析の過程で対象者を線引きし、定義づける営為に携わっているのだなという苦い思いが交差した瞬間だった。

- (2) 随分前のことだが、普段は話を聞く立場になることが多い私が、アメリカに留学経験のある「ヒロシマの子」としてインタビューを受けたことがある。インタビュアーは大手新聞社の記者だった。被爆三世であったその記者は、アメリカで原爆についてネガティブな体験があるという。戦争終結を早めたとして、原爆投下を正当化する論調が根強く残るアメリカで、彼女が感じた悔しさや憤りは容易に想像できる。それでも、質問にかすかな苛立ちを覚えたのは、インタビュアーから自身の体験に基づいたある種の意図を感じたから。伝えたいことを裏付けるためのデータ収集と言っては言い過ぎかもしれないが、個人の原体験は確かに強い。そうした自分の「窓」に自覚的であること、そしてインタビューされる側も聞き手が何を求めているかに敏感であることを逆照射的に教えてくれる機会であった。
- (3) 原爆の記憶といえば、腕にケロイドを残す祖母は「話してもどうせ分からん」と被爆体験を一切語らなかつた。原爆投下後、救助活動のため入市した父は「あの臭いは言葉では説明できん」と口を閉ざした。了解可能な形の物語に集約されることを拒んだかのように。当事者だからこそ、言葉に体験との乖離を感じざるを得なかつたのかもしれない。あるいは、話すことで、あの痛みをなぞりたくなかつたのか。当事者でなければ到底理解できまいという諦観もあつたらう。では、当事者でない研究者にできることは何か？

これらの出来事は、相手を客体化して見てしまう研究者としての習性に気付かされる契機となった。質的研究の醍醐味は、普段、声を聞くことが難しい人たちの生きる現実や心の動きに迫ることだと私は思っている。とは言え、当事者の協力なしには研究などできず、私自身、インタビューを拒否されたこともあれば、コミュニティのゲートキーパー的存在の人から警戒心を持たれ結局何もできなかったこともある。

相手を知りたいという思いがなければ研究はできない。言うまでもなく、関連文献を精読することも、現場に身を置くことも不可欠だ。ただ、相手の現実に参加することはできても、一体化は不可能で、むしろ、ある程度の距離がなくては分析という営みは難しい。当事者でなければ理解できない世界があるとしても、「分かってほしい」という気持ちで耳を傾け、相手の体験を自分に折り返そうと努めることはできるのではないかと。そして、彼（女）が納得できるような分析の切り口と言葉を提供したいと私は願う。自分の体験を受け止めてほしいという気持ちになってもらえるような、聴き手として選ばれるような人／研究者でありたいと願う。

質的研究では、これまでになく「当事者性」「自己再帰性」が求められていると言って良いかもしれない。だからこそ、専門家による定義づけではなく当事者コミュニティで共同的に言葉を立ち上げようとする当事者研究、研究者が自身の内的世界を分析的に描く／書くオートエスノグラフィー、感情面を重視しアートを用いてデータ収集や研究成果を公表するアートベース・リサーチなどが注目され始めているのだろう。どのようなアプローチも完全ではなく、完成形の研究もない。長い道のりだと思う。

冒頭で紹介した新入生への歓迎メッセージには続きがある。「溺れそうになったら、海に浮かぶ島にたどり着いて。そこからまた泳ぎ始めれば良いのだから。」この文脈での「島」は言うまでもなく「師」のことである。それは、一冊の本かもしれないし、論文のことも、時に同僚という場合もあるだろう。少なくとも私の研究生生活は、そのような様々な「島」に支えられていたと思えるのである。

引用文献

「インタビュー パイオニアに聞く 鯨岡峻」(2020). 『質的心理学フォーラム』第12号, 58-65頁.

私にとってコミュニケーション学とは

伊藤 萌紅 (立教大学)

私は昔から少女漫画が好きだった。小学生の頃は少女まんが誌『りぼん』を毎月買い、ページがよれるまで読み返し、ただひたすらヒロインたちに憧れていた。しかし高校生の頃、当時流行っていた Tumblr (ブログ型 SNS) を通じて初めてフェミニズムに触れることとなり、私は長年抱いてきた理想のヒロイン像に小さな違和感を覚えるようになった。なぜそこまでヒーローに尽くすのか？ 悲しみや嫉妬を耐え忍ぶことがどうして正義なのか？ 私は高校生活最後の自由研究で「少女漫画が描く『理想のヒロイン』とは」というエッセイを執筆することで、これらの問いに向き合った。先生曰く、このエッセイの課題意識や分析方法は、どうやら「コミュニケーション学」というものに近いらしい。この一言で、私はコミュニケーション学を大学で専攻することに決めた。



私はただ目の前の興味を追いかけていたらいつの間にかコミュニケーション学に辿り着いてしまったのだが、このように誰かの「面白い！」を易々と研究にまで昇華させてしまう点がコミュニケーション学の魅力だと感じる。そしてこの魅力は、コミュニケーション学が常に時代と共に生まれ変わり続けているからこそであると考えます。

私が大学院に入学した 2019 年、アメリカのコミュニケーション学界は一つの転機を迎えていた。きっかけは 2018 年に *Journal of Communication* で掲載された、Chakravartty, Kuo, Grubbs, McIlwain の "#CommunicationSoWhite"^(*) である。Chakravartty et al. は 1990 年から 2016 年までの間にコミュニケーション学の主要ジャーナルで掲載された論文および参考文献を分析し、掲載数・引用数ともに白人研究者が圧倒的多数を占めていることを指摘した。そして、コミュニケーション学の根底には白人至上主義が存在し、それゆえ有色人種の研究者にとっては不利な環境である、と論じた。またその翌年には *Quarterly Journal of Speech* で "#RhetoricSoWhite" を題材としたフォーラムが掲載され、よりレトリックに焦点を当てながら西欧主義および白人至上主義の存在を説いた。フォーラムの編集担当を務めた Wanzer-Serrano^(*) は冒頭の紹介文において、レトリック研究は「人種

差別問題」を抱えており、改革の必要性があると呼びかけた。他にも、レトリック研究における英語中心主義への批判^{(*)3}や、よりグローバルな視座にたつレトリック研究の推奨^{(*)4}する論文が掲載された。

このような潮流の中で、まだ右も左も分からない私はレトリックのセオリーを扱う授業で“#RhetoricSoWhite”について議論することとなった。レトリックは何を捨てるべきで、何を未来に残すべきか。授業の大半は、このように過去・現在・未来を行き来しながら討論を交わすことであったが、この光景を目の当たりにして私は圧倒されてしまった。古代ギリシアに由来するコミュニケーション学、そしてレトリックの枠組みが、いとも簡単に組み替えられようとしている。このようなことが果たして許されるのであろうかと、当時の私はそのダイナミズムに大きな不安さえ抱いた。

今の私は、この生まれ変わる力こそがコミュニケーション学の魅力であり強みであると理解している。社会情勢に敏感であるからこそ、この学問は今日的であり続けられる。私もこの潮流に加わりたいと思い、レトリックの西欧主義からの脱却を叶えるべく、私自身のバックグラウンド・文化知識・課題意識に基づいて研究に取り組んでいる。言い換えると、アメリカのコミュニケーション学に、日本ならではのレトリックを持ち込もうと努めてきた。その一方で、私は近ごろ大きな壁にぶつかっていると感じる。Audre Lorde^{(*)5}の有名な言葉^{(*)6}がある：「主人の道具で、主人の家を解体することは、絶対にできない」The master's tools will never dismantle master's house」。この言葉を自身に当てはめてみると、高等教育をアメリカで受け、西欧主義に基づく考え方・研究方法で形成された私は結局、西欧主義を再構築することしかできない。日本に帰ってきた今、日本の研究者の方々、そして日本のコミュニケーション学にじかに触れることで、この学問を学び直したいと考えている。そのようにして、いつかコミュニケーション学の変革の瞬間に立ち会うことができたならば、一研究者として幸せである。

注

- *1 Chakravartty, P., Kuo, R., Grubbs, V., & McIlwain, C. (2018). #CommunicationSoWhite. *Journal of Communication*, 68(2), 254–266. <https://doi.org/10.1093/joc/jqy003>
- *2 Wanzer-Serrano, D. (2019). Rhetoric's rac(e)ist problems. *Quarterly Journal of Speech*, 105(4), 465–476. <https://doi.org/10.1080/00335630.2019.1669068>

- *3 Sowards, S. K. (2019). #RhetoricSoEnglishOnly: Decolonizing rhetorical studies through multilingualism. *Quarterly Journal of Speech*, 105(4), 477–483.
<https://doi.org/10.1080/00335630.2019.1669891>
- *4 Agyeman Asante, G. (2019). #RhetoricSoWhite and US centered: Reflections on challenges and opportunities. *Quarterly Journal of Speech*, 105(4), 484–488.
<https://doi.org/10.1080/00335630.2019.1669892>
- *5 Lorde, A., & Lorde, A. (2018). *The master's tools will never dismantle the master's house*. Penguin Books.
- *6 虎岩朋加. (2016) 「ポスト構造主義の後のフェミニスト・ペダゴジーはどのようなものでありうるか. シンポジウム2 フェミニズムとジェンダー論は教育学に何をもたらしたか? ——思想史の中間総括——」 『近代教育フォーラム』 第 25 号, 139–147 頁.



2024年度 第1回理事会報告

日時：2024年5月18日(土) 13:00~15:10

会場：オンラインでの開催

参加者（敬称略）：20名（新理事含む）

守崎、高永、小山、松島、宮脇、小西、日高、内藤、松本、高井、會澤、田島、毛利、谷口、清宮、五十嵐、谷島、石黒、佐々木、宮曾根

欠席者（敬称略）：今井、宮崎、宮原、五島、横溝、水島、脇

議長：守崎(会長)

司会：松島(事務局長)→高永(副会長)

書記：脇(副事務局長) ※後日、録音を確認

会長挨拶

年次大会が2週間後に迫ってまいりました。よろしくお願いいたします。また、今期は理事任期満了の方が多く、初めて理事会に入っていただく方もいるのでぜひよろしくお願いいたします。

審議事項

【1】役員・監事人事について

1. 新理事と新監事について

守崎会長より、役員人事案が提示された（敬称略。所属は当時のもの）。このたび改選となったのは以下の役員である。

会長：守崎 誠一（関西大学）

副会長（総務担当）：松島 綾（立命館大学）

事務局長：五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）

副事務局長（会員サービス）：宮脇 かおり（桃山学院大学）

副事務局長（会計）：宮崎 新（名城大学）

学術局長：松本 健太郎（獨協大学）

副学術局長（年次大会担当）：谷島 貫太（二松學舎大学）

広報局長：小西 卓三（昭和女子大学）

副広報局長（ニュースレター担当）：田島 慎朗（関西大学）

副広報局長（ホームページ担当）：横溝 彰彦（久留米工業高等専門学校）

理事（企画担当）：石黒 武人（立教大学）

理事（渉外担当）：高永 茂（広島大学）

理事（前会長ポスト）：高井 次郎（名古屋大学）

理事（北海道支部長）：佐々木 智之（北海道科学大学）

理事（東北支部長）：宮曾根 美香（東北工業大学）

理事（関西支部長）：日高 勝之（立命館大学）

関東支部長と中国・四国支部長については、任期を超えているが留任となっている。これは支部の会員数が少ないことや次期支部長の選出が難航していることを考慮したものである。続いて、関久美子先生（新潟青陵大学）の監事就任と野中アンディ先生（コミュニケーションスキル協会）の監事継続が原案として示された。また、運営委員についても提案があった。

審議の結果、すべて承認された。なお、監事の人事については総会の承認が必要となる。

2. 副学術局長（将来構想担当）について

松本広報局長（次期学術局長）より、学会の活性化を図るために、副学術局長（将来構想担当）設置の提案があった。審議の結果、承認された。これを受けた人事案として、守崎会長と松本広報局長より、柿田秀樹先生（獨協大学）の就任が提案された。審議の結果、これも承認された。

【2】第53回（2024年度）年次大会関連

1. 学術局

小西学術局長より、年次大会のプログラムについて説明と確認があった。各セッションの司会は調整中であるが、理事にもお願いしたいとのことであった。また、基調講演者（赤坂先生）から当日資料なしとの連絡を受けたが、奥会津のミュージアムHPなどを示すことになるかもしれない旨の説明もあった。

2. 東北支部

宮曾根大会実行委員長より、何点か質問・確認があった。まず、談話室の利用時間を増やしたほうがよいかとの質問があった。審議の結果、予定通りの運用をすることになった。また、学内のジャーナルに掲載するために、学生の様子などを撮影しても構わないかとの確認もあった。審議の結果、会場校の学生・教員に関する撮影であれば許可することになった。最後に、学生が希望した場合、東北支部企画に参加（聴講）してもよいかとの質問があった。審議の結果、学生が希望するのであれば許可することになった。

【3】各局

1. 事務局

（1）2023年度決算について

宮脇副事務局長より、全体的に例年通りではあるが、年会費収入が減少しているとの説明があった。また、中部支部と九州支部から支部活動助成金の申請があったため、支部大会助成金と支部活動助成金を支給したとのことであった。

(2) 2024 年度予算について

宮脇副事務局長より、年会費収入は会員の減少傾向に鑑みて保守的に設定しているとの説明があった。また、基調講演者の宿泊費・交通費については実費支給とする。今後、研究者育成支援助成金について、発表学生懇親会費補助や見学の学生（非会員）参加費補助も可能にしたい。

そのほか、年次大会懇親会の当日参加について確認があり、5名程度であれば認めるとのことであった。

2. 学術局

(1) ジャーナル関係

内藤副学術局長より、第53巻1号について、繰り越し予定であった1本の入稿が間に合うことになったため、繰り越しせずに掲載することをお認めいただきたいとの説明があった。審議の結果、承認された。

【4】その他

1. 年次大会発表者の発表資格について

會澤東北支部長より、年次大会発表者の発表資格について確認があった。松島事務局長から、発表申し込みと入会・入金のタイミングに齟齬がないことが改めて確認された。

2. シニア会員の 신설について

守崎会長より、勤務校の定年退職をもって退会される方が多くいらっしゃるが、引き続き学会での活躍をお願いしたいとの説明があった。ついては、新しい会員身分「シニア会員」（たとえば年会費を半額にする）を設けてはどうかとの提案がされた。審議の結果、次回以降の理事会で事務局から原案が示されることとなった。

報告事項

【1】第53回（2024年度）年次大会関連

1. 学術局・東北支部

宮曾根大会実行委員長より、年次大会に関する報告があった。

- ・現時点での大会参加申し込みは56名、懇親会は36名。
- ・プレスリリースとしては、河北新報に予告記事を掲載していただけることになった。
- ・宮城県高校総体（ハンドボール）の試合が急遽行われることになり、年次大会当日に高校生もキャンパスにいるとのこと。
- ・当日の参加者情報（名札）については、参加者自身に書いていただくことにした。
- ・HDMIなどの機器接続については実行委員で対応可能。
- ・総会と基調講演はPowerPointで進める。
- ・バスの時刻表と学会の入会案内も用意する。

【2】各局

1. 事務局

(1) 入退会者報告

高永副会長より、現在の会員数について、総会員数 279（一般会員 263、学生会員 13、準会員 2、賛助会員 1）との報告があった。

2. 学術局

(1) ジャーナル関係

—第 53 巻第 1 号の状況について

内藤副学術局長より、前回理事会の承認および報告時には、4 本が掲載に向けて進行していたが、その後 2 本については修正が進んでいないとの報告があった。1 本は取り下げたうえで改めて投稿を検討中であり、もう 1 本は第 3 査読中である。したがって、3 本が掲載予定とのことであった。7 月末発行に向けて準備中であり、5 月 20 日頃、国際文献社に入稿予定である。

—第 53 巻第 2 号の状況について

内藤副学術局長より、新規投稿は 9 本であったとの報告がされた。前号からの修正中 1 本と新規投稿をあわせ、合計 10 本が現在査読中である。

—第 54 巻第 1 号について

内藤副学術局長より、ホームページと会員へのメールにより原稿募集中との報告があった。締め切りは 9 月末であり、現在のところ投稿はまだない。

(2) 次回年次大会のテーマについて

小西学術局長より、今回議題として提示できなかったが、新体制のもとで次回年次大会のテーマを早めにご検討いただいたほうがよいとの説明があった。守崎会長から、日程・場所ともにまだ正式に決まっていないが、広島（中四国支部）での開催を検討しているとの報告があった。

3. 広報局

(1) ニュースレター136号の発行とニュースレター137号の予定

松本広報局長より、ニュースレター136号（2024年5月号）が発行されたことと、次号となる137号は2024年11月に発行予定となっていることが報告された。

(2) HPへの掲載情報

松本広報局長より、以下の情報が学会HP【ニュース】に掲載されたことが報告された（前回理事会～2023年5月15日、4件）。

- ・ 2024年05月10日【ニュース】JCA第53回年次大会（2024年6月1日(土)・2日(日)）プログラム&プロシーディングス
- ・ 2024年05月07日【ニュース】『日本コミュニケーション研究』第54巻第1号論文募集のお知らせ
- ・ 2024年04月16日【ニュース】電気通信普及財団 2024年度上半期助成・援助公募情報のお知らせ
- ・ 2024年04月03日【ニュース】Peatixにて、日本コミュニケーション学会第53回年次大会の申し込みを開始いたします

(3) ML/X での情報発信について

松本広報局長より、HP 掲載情報のうち、会員向けに共有すべきものに関しては ML にて配信をおこなっているとの報告があった（前回理事会以後 9 件）。また、HP 掲載情報、およびそれ以外の情報（会員の新刊情報等）を含め、学会公式 X をつうじて発信をおこなっているとのことであった（前回理事会以後 1 件）。

(4) 第 53 回年次大会における出版社展示ブースについて

松本広報局長より、昨年度出展のあった 2 社（春風社と九夏社）に連絡をしているとの報告がされた。現時点で返事をもらえていないとのことであった。

(5) 理事会 ML に関する問題について

松本広報局長より、理事会 ML に不具合が生じていることが報告された。ML を管理している京都グラフィッシュ社に問い合わせたが原因は不明であり、今後も問題が継続するようなら、何らかの対応が必要と考えられるとのことであった。

[3] 各担当理事

高井理事より、JUCA での発表件数が減少していることが報告された。NCA で発表する絶好の機会なので、JCA のみなさまにもぜひ申し込みをご検討いただきたいとのことであった。

[4] 各支部報告

1. 北海道

佐々木新支部長より、新体制のもとでの支部運営に移行しつつあるとの報告があった。

2. 東北

宮曾根新支部長より、支部をあげて年次大会の準備を進めているとの報告があった。また、若い学会員を増やすにはどうしたらよいか、知恵を絞っているとのことであった。

3. 関東

田島支部長より、3 月 30 日（土）に関東支部研究会を行ったとの報告があった。支部研究会の内容を年次大会につなげるために、次回は 11 月までに開催したいと考えているとのことであった。

4. 中部

毛利支部長より、今年度も 9 月と 3 月に支部大会を開催予定との報告があった。若い会員を増やす試みとして、支部の歴史をたどって開示することを検討しているとのことであった。

5. 関西

日高新支部長より、3 月 10 日（日）に支部大会をオンライン開催したとの報告があった。「機械翻訳と生成 AI—未来を創るテクノロジー」というタイトルで、古谷祐一氏（株式会社ロゼッタ取締役、アジア太平洋機械翻訳協会監事）にご講演いただいたとのことであった。

6. 中国・四国

谷口支部長より、支部会員が限られており、今後の支部のあり方について検討していきたいとの報告があった。

7. 九州

清宮支部長より、運営体制に変わりはないことが報告された。今年度の支部大会は11月30日（土）に鹿児島大学で開催予定（テーマ未定）とのことであった。

【5】 その他

守崎会長より、所属先の変更等で、居住地（勤務校）と所属支部とのあいだに距離ができてしまうことがあるが、複数の支部で活動できるように対応を考えたいとのお話があった。

【6】 次回理事会開催日時・会場

総会で新体制が承認されたのちに改めて調整することとなった。

以上



2024 年度総会議事録

日 時：2024 年 6 月 1 日 (土) 14:30~15:15
会 場：東北工業大学八木山キャンパス (937 教室)

参加者：29 名、委任状 60 通

議長：師岡 淳也 先生
司会：松島 (事務局長)
書記：脇 (副事務局長)

1. 開会の辞・会長挨拶

司会の松島事務局長より開会が宣言された。続いて、守崎会長より次のような挨拶があった。

第 53 回日本コミュニケーション学会年次大会にご参加いただき誠にありがとうございます。仙台市内で行われるイベントのために宿泊先が確保しづらく、また台風が近づいていることもあって心配しましたが、無事開催することができました。このことはひとえに大会実行委員長の宮曾根先生をはじめ、準備に携わってくださったみなさまのおかげです。改めて御礼申し上げます。

おかげさまで大会参加者ならびに発表申し込み数も多く、非常に充実した大会になっております。この 2 日間がみなさまにとって学びのある時間になればと思っております。

2. 大会実行委員長挨拶

大会実行委員長の宮曾根先生より、次の挨拶があった。

天気やイベントの影響を心配していましたが、多くの方にご参加いただきありがとうございます。これも大会事務局のサポートのおかげだと感謝しております。

私からは連絡事項とお願いが何点かございます。まず、本学が高校総体の会場にもなっておりまして、多くの高校生がこのキャンパスに来ております (1 日目のみ)。ご了承ください。また、1 日目のみ参加の方は名札ホルダーを返却してお帰りください。ほかにも、ゴミの出し方にご注意ください。懇親会の会場はこのキャンパスにございます。

スタッフとして参加している学生も勉強になっているようです。2 日間どうぞよろしくお願いいたします。

3. 学術局報告

小西学術局長より、2023 年度学会賞・奨励賞の報告があった。なお、論文の部の対象は、2023 年度に発行の『日本コミュニケーション研究』第 52 巻第 1 号および第 2 号に掲載されたものである。

書籍の部（学会賞）：該当なし

論文の部（学会賞）：佐々木由美「日本人大学生の対面会話における「不安」感情とその関連要因の検討—初対面会話と友人会話における比較—」

論文の部（奨励賞）：埴幸枝「戦後「ぼやき漫才」と社会規範—当時の視点／現在の視点からの分析—」

続いて、感謝状の贈呈式が行われた。守崎会長より、第52回年次大会実行委員長であった師岡淳也先生に感謝状が贈呈された。

4. 議長・書記選出

会員のみの部に先立って、師岡淳也先生が議長に推薦され、承認された。

まず議長より、会則38条では「会員現在数の5分の1以上の出席」が議決の条件であることが確認された。それに基づき、現時点における会員数279名の内、総会出席者29名、委任状60通の合計89名（会員数279÷5=55.8名）で、総会が成立したことが確認された。また、協副事務局長の書記就任が承認された。

5. 役員新体制について

守崎会長より、理事会にて選出され会長が承認した2024年度の役員人事が報告された（敬称略。所属は総会時のもの）。このたび改選となったのは以下の役員である。

会長：守崎 誠一（関西大学）

副会長（総務担当）：松島 綾（立命館大学）

事務局長：五十嵐 紀子（新潟医療福祉大学）

副事務局長（会員サービス）：宮脇 かおり（桃山学院大学）

副事務局長（会計）：宮崎 新（名城大学）

学術局長：松本 健太郎（獨協大学）

副学術局長（年次大会担当）：谷島 貫太（二松學舎大学）

副学術局長（将来構想担当）：柿田 秀樹（獨協大学）

広報局長：小西 卓三（昭和女子大学）

副広報局長（ニュースレター担当）：田島 慎朗（関西大学）

副広報局長（ホームページ担当）：横溝 彰彦（久留米工業高等専門学校）

理事（企画担当）：石黒 武人（立教大学）

理事（渉外担当）：高永 茂（広島大学）

理事（前会長ポスト）：高井 次郎（名古屋大学）

理事（北海道支部長）：佐々木 智之（北海道科学大学）

理事（東北支部長）：宮曾根 美香（東北工業大学）

理事（関西支部長）：日高 勝之（立命館大学）

なお、関東支部長と中国・四国支部長については、任期を超えているが留任となっている。これは支部の会員数が少ないことや次期支部長の選出が難航していることを考慮したものである。続いて、守崎会長より、新体制における監事選出について説明があり、関久美子先生（新潟青陵大学）と野中アンディ先生（コミュニケーション

ンスキル協会) の就任が原案として示された。野中先生については継続となる。この監事の人事について、審議の結果、承認された。

6. 2023 年度事業報告・2024 年度事業計画について

守崎会長より、資料に基づいて 2023 年度事業報告（下記項目）があった。審議の結果、すべて承認された。

- ・ 年次大会の開催：第 52 回年次大会（大会実行委員長：師岡淳也、立教大学）
- ・ ジャーナル発行
- ・ 理事会開催：年 3 回開催（オンライン）。第 3 回理事会で会長選挙を実施。

引き続き、守崎会長より 2024 年度事業計画の説明があった。

- ・ 年次大会：第 53 回年次大会（大会実行委員長：宮曾根美香、東北工業大学）
- ・ ジャーナル発行
- ・ 理事会開催：年 3 回開催（オンライン）。

続いて、宮原理事から会長選挙の経緯と結果について報告と説明があった。新会長の任期は年次大会終了後から 2 年間とのことであった。

7. 事務局からの報告・審議事項

① 2024 年度の業務委託契約について（報告）

松島事務局長から、資料に基づいて、2024 年度も引き続き国際文献社と業務委託契約を行った旨の報告があった。算定基準書の金額は 1,150,490 円である。2023 年度は 1,146,710 円でありわずかに増えているが、これは 2024 年度契約時に総会のはがきの作成・発送を含んでいるためである。今年度から総会のはがきを廃止（Google フォームでの回答に移行）したため、実際は減額となる。このほかに、ジャーナルの印刷・発送、学会 HP の管理などを委託している。

② 2023 年度決算報告・2024 年度予算審議

宮脇副事務局長から、資料に基づき、2023 年度決算報告がなされた。

—収入の部

- ・ 主な収入源は年会費であり、前年度と大きな違いはない。

—支出の部

- ・ 大きな支出としては、ジャーナル発行費と事務委託費が挙げられる。
- ・ 他にも年次大会関係費が大きな支出となっている。2023 年度も外部委託しなかったために支出が抑えられた。会場となった立教大学からも助成金をいただき、わずかではあるが黒字となった。
- ・ 支部活動助成金について、2023 年度は中部支部と九州支部から申請があったため、支部大会助成金と支部活動助成金を支給した。

—監査報告

川内監事より、厳正な監査を行った結果、適正な会計処理が行われていた旨の報告があった。

以上のことについて、すべて承認された。

続いて、宮脇副事務局長より 2024 年度予算の説明があった。昨年度との主な差異は次の通りである。

—収入の部

- 年会費収入は、会員の減少傾向に鑑みて少なめに設定している。
- 年次大会関係費は大きな黒字にならないように設定している。

—支出の部

- 全体として概ね昨年度通りである。
- 昨年度と大きく異なる点は、基調講演者の交通費と宿泊費を計上している。昨年度は講演者が会場近辺にお住まいだったために計上しなかった。
- また、年次大会会場使用料として電気代や清掃費が必要なため計上した。
- 支部助成金も予算として組んでいるので、必要な支部は申請していただきたい。

以上のことについて、審議の結果、すべて承認された。

8. 広報局報告

松本広報局長より、①ニュースレターの発行（第 134 号～第 136 号）、②ホームページによる情報掲載、③会員メーリングリストによる情報提供、④X による情報提供について報告があった。会員メーリングリストについては、宛先不明によるエラーが発生しており、改めて「マイページ」（学会ホームページ）での登録情報更新の周知・要請がなされた。

9. 次回大会について

守崎会長より、2025 年度年次大会は広島（中国・四国支部）での開催を検討しているとの報告があった。終戦 80 年を迎える年でもあり、もし実現すれば意義深いものになる。日程や会場、テーマについても検討中とのことであった。

10. 閉会の辞

議長より議事の終了が宣言されたのち、松島事務局長から参加者への御礼と総会の終了が宣言され散会となった。

以上

学術局からのお知らせ

『日本コミュニケーション研究』(Japanese Journal of Communication Studies)は、同一巻の第1号と第2号を同一年度内に発行できるように調整し、第53巻第1号が2024年7月に発行されました。第2号は、2025年1月発行にむけて編集作業を進めております。研究論文に加え、第53回年次大会の論考が掲載予定となっています。また、第54巻第1号への投稿が9月末に締め切れ、新規投稿4本、再投稿1本の論文が投稿されました。こちらは2025年7月発行を目指し、その後の作業が進められています。

現在は、第54巻第2号(2026年1月末発行予定)への投稿論文を募集中です。締め切りは2025年3月末日ですので、是非皆さまの研究結果を論文としてご投稿ください。投稿は、ワード等で作成された「論文」「シノプシス」「ファイル作成に使用した機種を加えた著者情報」の3つのファイルを添付して、以下の指定メールアドレスに送付するという形をお願いいたします。投稿や執筆の詳細につきましては、公式ホームページにある最新の「研究論文集投稿規程」「学会誌執筆要項」をご参照ください。投稿される際は、ジャーナル専用アドレスに加え、編集委員長のメールアドレスにも「CC:」にて送付をお願いいたします。

メールアドレスは以下の通りです。

To: journal[@を入れる]caj1971.com

CC: itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp

上述したメール投稿で受領の返信がない等の不具合、また、ジャーナル投稿に関するその他のお問い合わせは、ジャーナル担当の内藤(itnaito[@を入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp)までご連絡ください。可能な限り迅速に対応いたします。皆さまのご投稿を心よりお待ちしております。

2024年度ジャーナル『日本コミュニケーション研究』掲載論文

『日本コミュニケーション研究』第53巻第1号(2024年7月発行)

研究論文

- 申 知元・潮村 公弘：仮想接触法が国イメージ・国民イメージの態度変容に及ぼす因果関係の検討—日本人と韓国人の相互的データを用いて—
- 上土井 宏太：日本におけるディベート教育に関する肯定的および否定的言説の批判的分析
- 張 曦冉：異なる知識・経験を持つメンバーからなるグループの課題解決談話—「提案の発展」へのメンバーの参与に着目して—

今後も充実した『日本コミュニケーション研究』の発行に努めてまいりますので、皆さまからのご投稿、ご協力をお願い申し上げます。

(副学術局長：ジャーナル担当 内藤 伊都子)

第54回年次大会 発表論文・企画セッション募集

2025年に開催される第54回年次大会の発表論文・企画セッションを募集いたします。以下をご参照のうえ、ふるってご応募ください。

【大会開催要項】

- 日程 2025年6月7日(土)・8日(日)
- 場所 広島修道大学(中国・四国支部開催)
- テーマ 「忘却に抗うコミュニケーション」(仮)

【募集内容】

- 応募締切 2025年2月1日
- 申し込み方法 メールにて申し込み。添付書類として、プログラム掲載用要旨(「要旨」)、プロシーディングス用原稿(「原稿」)を送付する。添付書類作成の際には、学会HPに掲載するひな形を必ず使用すること。ひな形を使用していない場合、修正・再提出が必要となる。
- 応募・問合せ先 副学術局長 谷島貫太(大会担当、二松学舎大学)
 - ・ 下記2名に同報送信学術局長 松本健太郎 mt_kentaro[@を入れる]hotmail.com
副学術局長 谷島貫太 kanta.tanishima[@を入れる]gmail.com
- 募集①「研究発表」：質疑応答を含む30分程度の、論文発表を前提とした研究発表。
- 募集②「パネル発表」：統一テーマについての90-120分程度の研究発表。
- 募集③「企画セッション」：会員相互の研鑽や情報交換を目的とした90-120分程度の自由企画。形式はパネルディスカッション、ワークショップ、模擬講義など。その他の企画案も可能で、学術局にご相談のこと。

○応募資格

「研究発表」：

1. 単独発表の場合はJCA正会員であること。
2. 共同発表の場合、筆頭著者がJCA正会員であること。

- 2.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、著者の半数以上が学会員であること。
- 2.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 2.a.の条件は当てはまらない。
3. 共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。
 - 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。
 - 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 3.a.の条件は当てはまらない。
4. 研究発表を行う JCA 正会員は申込時に 2024 年度までの会費を納入していること。

「パネル発表」：

1. 司会が JCA 正会員であること。
2. パネルにおける発表が単独発表の場合は、発表者は JCA 正会員であること。
3. パネルにおける発表が共同発表の場合、筆頭著者が JCA 正会員であること。
 - 3.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、著者の半数以上が学会員であること。
 - 3.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 3.a.の条件は当てはまらない。
4. パネルにおける発表が共同発表の場合には、筆頭著者が当日の口頭発表代表であること。
 - 4.a. 筆頭著者が正会員（一般会員）である場合、口頭発表者の半数以上が学会員であること。
 - 4.b. 筆頭著者が正会員（学生会員）である場合は 4.a.の条件は当てはまらない。
5. パネル発表にて発表を行う JCA 正会員は申込時に 2024 年度までの会費を納入していること。

「企画セッション」：

司会が JCA 正会員であること。JCA 会員以外が参加する場合は、応募の際に参加者としてふさわしい理由と参加の正当性を明記すること。JCA 会員は申込時に 2024 年度までの会費を納入していること。

発表の採否の連絡は 3 月下旬頃を予定している。なお、パネル、企画セッションについては、特別な理由があって早い時期の採否連絡が必要な場合は、その理由を応募の際に明記すること（ただし早期の採否の連絡が確約されるわけではない）。

学会賞（書籍部門）応募について

- ・ 対象：本学会正会員によるオリジナルの著作のうち、過去5年間に応募していないもの。共著・分担執筆作品は、全執筆者がJCA 会員でなくともよいが、著作へのJCA 会員の貢献が顕著と認められるもの。
- ・ 締め切り：2024年12月31日(消印有効)
- ・ 応募資格：JCA 正会員(2024年度までの会費を納入していること)
- ・ 応募方法：審査用の著書3冊、および100字程度の著作概略および著者の名前・連絡先情報（著書の返却はなし）
- ・ 応募数量：会員一人一冊(自薦、他薦問わず)
- ・ 問い合わせ先：下記2名に同報送信
 学術局長 松本健太郎 mt_kentaro[@をを入れる]hotmail.com
 副学術局長 内藤伊都子 itnaito [@をを入れる]ed.tokyo-fukushi.ac.jp
- ・ 審査書類一式提出先：学術局長 松本健太郎
 住所：〒340-0042 埼玉県草加市学園町1番1号
 獨協大学外国語学部英語学科松本健太郎研究室
 電話：090-6540-6727
 E-mail: mt_kentaro[@をを入れる]hotmail.com

事務局報告

事務局からのご報告とお願い

1. 2024 年度 JCA 総会が 6 月 1 日（土）に、東北工業大学会場で開催されました。

2. 会費納入のお願い

年会費の振込用紙を 4 月にお送りしました。未納の方はお早めにお振込みくださいますようお願い申し上げます。

3. 学生会員・準会員登録申請締め切り

大学院生対象の学生会員、学部生対象の準会員としての登録は 7 月末日をもって締め切りしました。前年度学生 会員または準会員であった方で、新たに登録をされなかった方は自動的に一般会員に切り替えますのでご了承ください。なお、すでに今年度の学生会員または準会員の会費を振り込み済みで登録をされなかった方には差額を請求させていただきます。

4. マイページの利用開始について

2019 年 12 月から「マイページ」（会員情報管理システム）が利用できるようになっています。マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しい HP の右上のバナーからログインできますので、できるだけ早い時期にアクセスしていただいて、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。マイページへのアクセスに必要な ID とパスワードは、年会費の請求書と一緒に送りしております。「お振り込み

関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なさった場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局

jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

5. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会 HP にある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

6. ジャーナルバックナンバー、記念図書の購入申込みと閲覧・複写申込み

これまで発行されたジャーナルバックナンバーなど学会発刊物を購入されたい場合は、学会事務局にお問い合わせください。また、科学技術情報発信・流通総合システム J-STAGE

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja/>) に論文が掲載されており、閲覧・印刷する

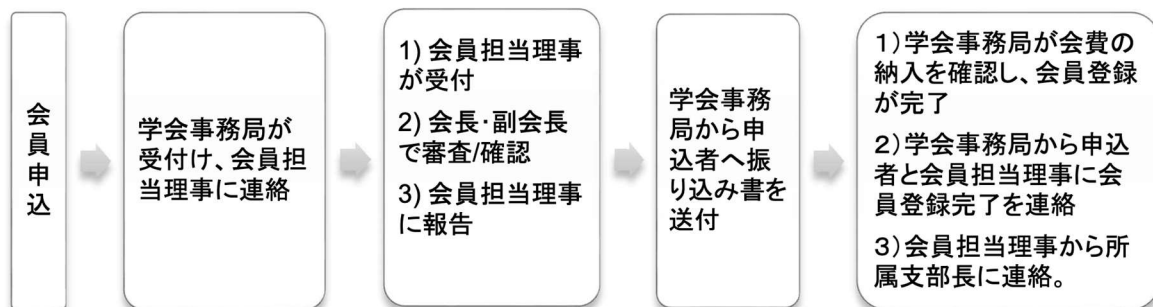
ことができますので、こちらも是非ご利用ください。同サービスを利用せずに複写をご希望の場合は、学会事務局までお問い合わせください。

7. 新規会員の手続き

JCA では新しい会員を随時受け付けています。下記のような流れで、新規会員の手続きを行います。ご不明な点がございましたら、学会事務局までご連絡ください。

皆様のご協力をお願い申し上げます。

【会員申込から会員登録完了までの流れ】



広報局便り

1. 新刊情報提供のお願い

広報局としては、会員の皆様の新刊情報を学会公式 X (@jca_1971) および ML で発信・配信していきたいと考えております。自薦、他薦を問わず、新刊のご著書に関する情報をお寄せいただきたく、お願い申し上げます。ぜひ、ご検討ください。

*学会ホームページに記載されている「基本方針」に合致しないものに関しては、学会公式 X 等での発信をお断りする場合がございます。ご了承下さい。

<http://jca1971.com/keynote>

2. 広報局からのお知らせ

- ① 広報局では ML をもちいて、学会 HP における掲載情報を中心に会員の皆様あての情報配信をおこなっております。それらが届いているかをご確認いただいたうえで、もし不達の場合には、JCA ニュースレター今号 xx ページのご案内をご参照いただき、マイページへの登録手続き／メールアドレスの更新をお願いいたします。
- ② 広報局では各支部や各研究会の情報、他学会や教員公募などの情報も、ホームページにアップロードしていきたいと考えております。ぜひ、情報をお寄せください。
- ③ 皆様からも、国内だけでなく、海外の学会を含めて関連する講演会や研究会があれば情報として広報局までご一報下さい。ホームページにアップロードしたいと思います。
- ④ ホームページ (<http://jca1971.com/>) は、適宜更新しております。ご意見やご質問を頂ければ幸いです。
- ⑤ JCA 公式 X (@jca_1971) も適宜更新しております。是非フォローをお願いいたします。

(広報局長 小西 卓三)

JCA ニュースレターへのご寄稿のお願い

日本コミュニケーション学会では、ニュースレターへの会員の皆様のご寄稿を募集しております。以下の要領で奮ってご寄稿ください。宛先：田島慎朗 (tajima-n[@を入れる]kansai-u.ac.jp)

① 著書紹介

会員の皆様の著書を紹介するコーナーです。自薦、他薦を問わず、会員の皆様の著書をご紹介ください。和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

② コラム：コミュニケーション教育

コミュニケーション教育に関する実践報告、事例紹介、展望、論考、その他のエッセイを受け付けています。

和文・英文で1枚程度（A4）の原稿を受け付けております。

③ NL 表紙の写真

ニュースレターの表紙を飾る写真を募集しております。本学会のNL表紙に相応しい写真がございましたら是非お寄せください。（写真は、会員の皆様ご自身でお撮りになったもの、または著作権をお持ちの写真に限ります。また、写真内容が法令に触れないようご配慮ください。）

支部ニュース



北海道支部



(支部長 佐々木 智之)

北海道支部は水島梨紗支部長が退任され、それに伴って2024年4月より役員を以下のとおり交代しました。

支部長 佐々木智之

事務局長 竹内康二先生

会計 足利俊彦先生

監査 北間砂織先生

新体制で初の支部活動を行いましたので報告します。

1. 大会名：2024年度 JCA 日本コミュニケーション学会北海道支部大会
2. 日時：2024年9月7日（土曜日）
14：00～17：00
3. 場所：北海道科学大学 図書館
4. 大会テーマと趣旨：学習サポートと授業運営
5. プログラム

(1) 講演

テーマ：子供の貧困と学習支援

～学びのサポート事業の取り組みについて～

講師：公益財団法人 さっぽろ青少年女性活動協会
子ども若者事業部

子ども事業課 係長 田中基康氏

(2) 支部総会

(3) 研究発表

テーマ：第2外国語習得における Reading
Comprehension 理論の現在地

～外国語指導に示唆すること～

発表者：札幌国際大学名誉教授 竹内康二

(4) パネルディスカッション

テーマ：学習サポートと授業運営

久しぶりに対面での支部大会を開催することができて新鮮でした。パネルディスカッションで

は大学教員だけではなく、会場スタッフの大学生も加わり活発な意見交流ができました。今後の支部活動を検討していく上で、学生が参加できる企画という新しい視点が生まれました。次の支部研究会は12月の予定です。



東北支部



(支部長 宮曾根 美香)

6月1日～2日にJCA第53回年次大会(大会テーマ「地域と記憶」)が東北工業大学(仙台)で開催され、盛況のうちに終了しました。東北支部は支部企画として、well-beingに関するシンポジウムとパネルディスカッションを行い、様々なフィードバックをいただきました。支部会員は改めて大会テーマの重みを実感し、well-beingの研究と実践に意義を感じた次第です。

また、例年通り12月14日(土)に支部研究大会をオンライン(Zoom)で実施いたします。研究発表と支部会を予定しています。研究発表申し込みは宮曾根宛11月14日(木)までです。当日ご参加を希望される方も宮曾根までご連絡ください。詳細はJCA東北支部ホームページをご覧ください。



関東支部



(支部長 田島 慎朗)

近年、外国人排斥とヘイトスピーチは、特に関東の一部の都市で目立った動きを見せてきました。そこで、関東支部では以下の要領で研究会を開催することといたしました。参加をご希望される方は、このフォームにお申し込みください。

テーマ：コミュニケーション学とヘイトスピーチ

日時：2024/11/16(土) 15:00-18:00

場所：二松學舎大學 九段キャンパス

1号館 402 教室

- 発表者：1. 立教大学 酒井信一郎先生
 2. 二松學舎大學 谷島貫太先生
 3. 立教大学 Megu Itoh 先生
 4. 国際基督教大学 青沼智先生

発表内容は、ヘイトスピーチの成立要件（酒井先生）、「社会的指標性」の概念とヘイトスピーチとの関係（谷島先生）、ヘイトスピーチの流布（circulation）について（Itoh 先生）、そしてネットウヨをフィクショナルなキャラクターとしてとらえたうえでのヘイトスピーチ事例（青沼先生）となる予定です。各先生方のご発表の後、十分な時間を質問・討議に充てる予定ですので、興味のある方はぜひ奮ってご参加ください。

参加をご希望の方は、以下のフォームにご記入ください（キャンパスの安全のため、記入いただかないと見学いただけません。ご了承下さい）。対面での懇親会も予定しておりますので、ぜひご参加下さい！締め切りは2024/11/12（火）までです。

<https://forms.gle/B4u98EYEd6Wc1P1U7>



関西支部

（支部長 日高 勝之）

関西支部では、2024年11月23日（土）に関西支部大会を対面で開催いたします。基調講演に田島慎朗先生（関西大学外国語学部教授）をお招きし、「コミュニケーション研究から見たアメリカ大統領選挙テレビ討論会」というタイトルでお

話いただいた後、同テーマで1時間程度の質疑応答、ディスカッションを予定しております。

日時：2023年11月23日（土）14:30-17:10

会場：関西大学梅田キャンパス（対面）

703 教室

参加申し込みフォーム：

<https://forms.gle/SMtD4ZGaSM5Kx2ib6>

支部大会終了後は、会場近辺の梅田駅周辺での懇親会も予定しておりますのでぜひご参加ください。

九州支部

（支部長 清宮 徹）

九州支部の2つの大きな活動についてお知らせします。一つは、九州支部大会についてのお知らせです。今年度は11月30日（土）に、上土井宏太先生が大会実行委員長を務め、鹿児島大学にて支部大会を開催します。昨年に引き続き、対面を中心に実施しますが、ハイブリッドでの参加も可能にいたします。今大会では、テーマを「AI時代のコミュニケーション-コミュニケーション学は持続可能か」といたしました。基調講演は、鹿児島大学の伊藤奈賀子先生にお願いしております。AIとコミュニケーションの今後について議論していきます。また今大会では、特別セッションとして3人の支部長経験者（池田理知子先生、吉武正樹先生、清宮徹）が、サブテーマである「コミュニケーション学は持続可能か」について講演し、参加者のみなさんと意見交換致します。この企画は、昨年の九州支部30周年で行った支部長の座談会からのアイディアで、若手研究者の育成と教育を重視すること共有し、今年度はその3人が短い講演を行ったうえで、参加者と意見交換するものです。またテーマ以外にも、いろいろな研究発表が報告される予定です。ご関心のある方は、ぜひご

参加ください。プログラムなど詳しくは、九州支部ホームページをご参照ください。

日時： 2024年11月30日(土)

会場： 鹿児島大学&オンライン

(ハイブリッド)

大会テーマ：AI時代のコミュニケーション

～コミュニケーション学は持続可能か～

基調講演：伊藤奈賀子先生(鹿児島大学)

特別セッション：

- ① 池田理知子(福岡女学院大学)
- ② 吉武正樹(福岡教育大学)
- ③ 清宮徹(西南学院大学)

ホームページ：<http://kyushu.jca1971.com/>

もう一つのお知らせは、ニューズレターの発行です。例年九州支部では、年2回のニューズレターを発行していましたが、今号は内容的にも分量的にも大きなニューズレターになったため、タイミングの点からも、合併号となりました。九州支

部の運営委員の現メンバーが近況報告を書きましたので、ぜひご覧ください。じつは私は、半年間の在外研究でロサンゼルスに滞在していましたので、その近況もお話ししています。次のURLからご覧ください

(http://kyushu.jca1971.com/newsletter_4243.pdf)

さらに九州支部の紀要も発行されましたので、ぜひご参照ください。昨年の支部大会の基調講演についても、論文になっています。引き続き、九州支部の活動にご支援お願い申し上げます。

連絡先

〒162-0801

東京都新宿区山吹町 358-5 アカデミーセンター

日本コミュニケーション学会事務局

Tel: 03-6824-9372

Fax: 03-5227-8631

[jcom-post@\[@を入れる\]as.bunken.co.jp](mailto:jcom-post@[@を入れる]as.bunken.co.jp)

マイページ登録のお願い

日本コミュニケーション学会 広報局

1. マイページの利用開始について

マイページでは「会費納入状況の確認」「会員情報の検索」「会員情報の変更・確認」などができます。新しい HP の右上のバナーからログインできますので、**できるだけ早い時期にアクセスしていただき、記載内容の確認・登録・更新をお願いいたします。**マイページへのアクセスに必要な ID とパスワードは、年会費の請求書と一緒に送っております。「お振り込みに関するご注意」の欄に〈マイページのご案内〉がありますのでご覧ください。もしこの用紙を紛失なされた場合には、日本コミュニケーション学会事務局（以下「学会事務局」とする）までお問い合わせください。

問い合わせ先： 日本コミュニケーション学会事務局

jcom-post[@を入れる]as.bunken.co.jp

2. 住所等変更届のお願い

住所や所属が変更になった場合には次のいずれかの方法で手続きをしてください。

- (1) 日本コミュニケーション学会 HP にある「マイページ」にアクセスし「会員情報の変更」を選択して必要事項を更新してください。メールアドレスの更新も「会員情報の変更」内で行うことができます。
- (2) 学会事務局までメール、郵送、ファックスのいずれかでご連絡ください。

編集後記

今回から2年間、南山大学の今井達也先生から引き継ぎニュースレターを担当することになりました。今井先生をはじめとする旧広報局の先生方には、今まで大変お世話になりました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。ニュースレター担当は以前にもやっていたことがありますが、そのおかげか、残しておくべき点と変えるべき点については前回に担当した時よりも幾分承知してきたように思います。会員の皆様のお力をお借りしながら、ニュースレターをより良いものにしていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

広報局 ニュースレター担当 田島 慎朗